

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>

E-mail:comm.tko@nsk.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



第58号

(通巻1293号)

2021年10月3日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

闇の中にさえも光は！

主教 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸



小さい頃、高い所が苦手でしたので、飛行機はおろか、観覧車やジェットコースター、木登りも恐怖に感じていました。しかし、ひよんなことから逆転しました。さすがに今では観覧車やジェットコースターに乗ることはありませんが、飛行機は大好きです。操縦してみたい程です。ほぼ毎日、目の前にありながらそうそう昇る機会はありませんが、ごくごくたまに東京タワーの上まで行きますと、世の中の広さとともに、自らの小ささに気づかされ、同時に神様の偉大ささえも感じさせられることがあります。人は誰でも苦手なこと、怖さや不安を感じるものがあります。もちろん恥ずかしいことでもなければ、欠点でもないはず

です。
今、世界中が恐怖と不安

の渦中にあります。しかし、その中であつてさえも、信仰と祈りに裏打ちされた繋がりは消え去らず、むしろこの不安と恐怖の中にあつてさえも、勇気と力、希望と安心を生み出し、与えてくれていきます。改めて、祈りの繋がりが、いのちの繋がりが、人との繋がりの強さに感謝しない訳にはまいりません。そして、そこにも神様の働きを、恵みを深く感じさせられます。

話が変わりますが、ある夜、夜ですから当然暗闇の中でのことでしたが、その暗闇の中で何とも形容しがたい恐怖を感じたことがありました。理由も原因も分からないだけに、恐怖は増し加わるだけでした。まるで、時代劇に出てくる部屋の四方が迫ってくるかの場面を彷彿とさせるものでした。気持ちの良くない汗を

かき、漆黒の闇に覆われた感じでした。しかし、間もなく、ふとある思いが心を占めました。四方八方を闇に覆われているがらも、さらにそれを包み込む神様の光に包まれているという思いでした。思いというよりも、感じと言ったほうがより正確であつたと言えます。

ともすれば、私たちは神様を向こうに、それどころか遥か彼方に見て、自分はこちら側にといい感覚を持つこともあります。しかし、神様は遥か掛け離れた遠い向こうにではなく、私たちの全てを包んでくださっている、その確信はどれ程私たちに安らぎを与えて下さっているかの「経験」以上に「体験」でした。気持ちの悪い汗はすっと引き、ほのぼのとした温かな何かを感じさせられる体験でした。

都会で暮らしていると、真つ暗闇、漆黒の闇を経験することはなかなかありません。24時間煌々と明

かりは点り、スイッチ一つでいかようにもなります。けれども、本当の闇の中では誰もが不安や恐れを感じることでしよう。しかし、それを覆いつくす光を知っていれば、光を感じるものがあれば、話は全く異なってくるでしょう。

真つ暗闇、漆黒の闇だけでなく、「影」というものもネガティブな意味を与えます。けれども、影を見ることがすることは光なくしては起こり得ません。ただ、自分の前に影を見る時、後ろで輝いている光があることをしばしば忘れてしまうことがあります。目の前に光を見ている時、影は後ろにできますから見えませんが、前に影しか見えないような時にこそ、後ろで輝いている光のことを忘れずにいたいと深く祈り願いたいものです。光の中に闇は輝き得ませんが、闇の中でさえも光は輝くことを心に深く留めおきたいものです。

特集・北関東教区とのこれからの歩みについて

北関東教区と共に

新しい教区の新設を目指して

司祭 中川 英樹

はじめに

本年3月開催の定期教区会高橋宏幸教区主教の開会演説でも触れられ、また『きょうくニュース』などで、時折、ご紹介させていただいております、北関東教区と東京教区とのこれからの歩みについて、そもそもの発議と経緯、現時点までの進捗、また今後の道程を少し詳細にご報告させていただき、皆さまのご関心とご理解を深めていただければと願います。

経緯

日本聖公会は、昨年2020年10月27日から29日にかけて開催された第65（定期）総会において、二つの大きな歴史的議案を可決しました。一つは、日本聖公会を東日本、中日本、西日本の三つの宣教協働区に分け、各協働区内に設置される協働委員会で区内の運営、宣教・牧会などについて協働を推進し、教区再編について検討するというもの。も

う一つは、日本聖公会の再編に

向けて、教区が教区主教を置かず、管理主教のもとで、他教区との合併等の再編を目指す「伝道教区」となることができる、としたことです。

日本聖公会全体の教区再編は、半世紀にわたり協議されながら実現を見ることがなかった大きな課題です。その教区再編を実現するという、日本聖公会の固い決意が確認された、この総会決議を受け、隣接の北関東教区は、2020年11月23日に開催された北関東教区第87回（定期）教区会において、



北関東教区主教座聖堂

日本聖公会の未来を見据え、伝道教区となることを決議しました。

北関東教区が、伝道教区となるための認証を正式に受けるには、2021年3月6日に開催される、日本聖公会第66（臨時）総会における承認を待たなければなりませんでしたが、歴史的にも地理的にも関係の深い、北関東教区と東京

教区との間では、総会決議に先んじて、伝道教区となる北関東教区と東京教区両教区の、これからの新しい関係の展望、宣教協働についての模索が始まりました。そこです、2月22日に、両教区の常置委員長間で、今後の協働の方向性、ことに、合併ではない新教区設立の可能性などについての協議

の場が持たれ、その後、総会にて北関東教区が伝道教区として承認され、さらに管理主教に高橋宏幸東京教区主教が委嘱されたことを受けて、3月15日に、両教区合同の常置委員会を開催し、高橋主教の管理主教としての職務の範囲や東京教区側の協力体制について話し合うと共に、この先の宣教協働の方向性、可能性についても協議し、その協働関係の一つの目標・着地点として、新しい教区の新設に向けて共に取り組んでいくことを確認しました。これらの確認を経て、3月25日聖マリヤへのみ告げの日に、両教区主教名による『北関東教区・東京教区こ

れからの歩みに向けて』が発信され、両教区に連なる皆さまに、今後、様々な草の根の交流、相互理解、あらゆる分野における協力を継続しながら、5年後を目処に、新しい教区を新設するという目標を目指し協働していくことが広く伝えられました。

さらに、5月11日には、北関東・東京教区の合同の教役者会が開催され、参加した44名の教役者間で、今後2つの教区が、「新しい教区の新設」に向けて互いに取り組んでいくという理解を共有することができたことは、これから先の大きな希望を予感させるものとなりました。

東日本宣教協働区と協働委員会

これら北関東教区と東京教区による、宣教協働、新しい教区の新設に向けての取り組みは、単なる2教区間の活動ではなく、大きくは東日本宣教協働区全体の働きとして位置づけられるものです。東日本宣教協働区は北海道、東北、北関東、東京の4つの教区からなる組織体ですが、日本聖公会の宣教体制強化と教区再編の推進がその主な働きで

す。そして、それらの働きを推進

していくのが、協働委員会となります。その働きとして、先にも述べましたが、日本聖公会法規によって、宣教協働区内の運営、宣教・牧会などについて協働を推進し、また教区再編について検討すること。さらには伝道教区の運営、宣教・牧会などについて宣教協働区内の協働を推進し、5年を期限として教区再編あるいは教区新設することを検討することが求められています。

新たに設置された東日本宣教協働区は、本年2月1日に、初会合となる第1回目の協働委員会をリモート形式にて行いました。協働委員会は、北海道、東北、北関東、東京、それぞれの教区主教と任命された委員2名、全体で12名によって構成されています。北海道教区からは植松誠主教、大町信也司祭、大友宣さん。東北教区からは吉田雅人主教、八木正言司祭、赤坂有司さん。北関東教区からは広田勝一主教（退任後は鈴木伸明司祭）、矢萩栄司司祭、廣瀬清さん。東京教区からは高橋宏幸主教、中川英樹司祭、樽谷雪さんが

出席しています。

この第1回会議では、日本聖公会法規にある、協働委員会の働きとして、「宣教協働区内の運営、宣教・牧会などについて協働を推進し、教区再編について検討すること」、伝道教区については、「5年を期限として教区再編、あるいは教区新設を検討すること」がタスクであることが改めて共有されました。

また、①教区再編に向けてのグランドデザインの検討（各教区の課題との関わりの中で）②個別の宣教協働メニューの提案（人事、財政、青少年プログラムや聖職試験等）③伝道教区の実践の共有化、とくに伝道教区として歩み始める予定の、北関東教区の様々な歓びや困難を共に共有していくことが、同委員会の当面の課題として整理されました。さらに、地理的、歴史的、文化的にも差異を持つ各教区の情報共有、課題の整理をスムーズに進めるため、協働委員会を、北海道教区と東北教区の北2教区と、北関東教区と東京教区の南2教区とに分け、分科会を設けることとし、その協議結果を毎回の協

働委員会で報告し、全体で宣教協働を協議、推進して行くこととしました。現在、協働委員会は、2ヶ月に一度のペースで、これまでに3回の会合が開かれています。

北関東・東京教区分科会（仮称・タスクフォース）

協働委員会内に設置された分科会、とくに、北関東・東京教区の分科会（仮称・タスクフォース）は、専ら、高橋主教の霊的指導の下、新教区の設立に向けて、多角的に方針を協議・確認し合いながら、具体的な企画を立案、提示、広報していくことをテーマに議論を重ねています。タスクフォースには、北関東教区側から矢萩栄司司祭、鈴木伸明司祭、斎藤徹司祭、養田博さん（浦和諸聖徒教会）、廣瀬清さん（下館聖公教会）、東京教区からは、中川英樹司祭、太田信三司祭、樽谷雪さん（東京諸聖徒教会）、田中まきさん（東京聖十字教会）、藤田新一郎さん（三光教会）がメンバーとして加わっています。高橋主教は両教区の主教として司牧的な立場で関わっております。

4月16日に、第1回の会議がリモートで開催され、北関東教区の斎藤徹司祭と東京教区の太田信三司祭共同による、新教区設立に向けての議論の叩き台となる、5年間の行程イメージと、宣教協働の具体的なプラン、共通課題の整理されるべき範囲などについてのプレゼンテーションが行われました。そこでは、5年後の新教区成立にはスピード感を持つて相互交流を深める必要があることを大前提とし、2021年にはまず交流活動を立ち上げ、共通の代祷作成、合同教役者会、伝道区（北関東）と教会グループ（東京）間の協働、広報物発行、代祷に応じた信施奉献を実施する。2022年には礼拝、教育、牧会、宣教、財政等のワーキンググループを創設し、教区規則、教区事務所機能、主教座聖堂規則、合同礼拝・默想会、教役者の人事交流、教会探訪、財務担当者会議等の設置を目指し、2023年には教育センター、霊性センターの設立の検討や、システム・実務担当（チーム）等による新教区設立のための合同協議

会の設置。2024年には宗教法人規則の叩き台作成開始、共通の教区時報発行。2025年春に、教区規則完成、両教区にて新教区設立承認、秋には日本聖公会総会にて、新教区設立といった、行程全体のイメージ案が提起されました。（詳しくは太田司祭の『新教区設立へ向けて』スケジュールについて、イメージの分かち合い』をご参照ください。）このプレゼンテーションの内容については、5月11日に開催された北関東・東京教区の合同の教役者会でも共有されました。

5月24日に開催された第2回タスクフォースでは、新教区設立のイメージ、とくに5年後の新教区設立の着地点について、双方の教区が抱くイメージに相違があることが認められたので、それぞれの教区内での意識の共有化を、6月23日開催の第3回タスクフォースまでの宿題とし、その第3回タスクフォースでは、再度、5年後の新教区設立の着地点について協議を重ね、財政や教役者の俸給などセンシティブな課題に関しては5

年という年限を敢えて設けず、慎重・丁寧に進めていくことが確認されました。さらに、7月30日の第4回タスクフォースでは、早々に進めることのできる宣教協働についての実施プラン、また、新教区設立の歩みについての信徒向け資料の作成準備に入ることが確認されました。

タスクフォースでは、正確な情報がタイムリーに皆さまに届くことを心掛けています。この先、皆さまに届く、さまざまな情報に関心を寄せていただくことが、何よりも、新教区設立の歩みに欠かせないことであると考えています。

おわりに

―新教区設立の向こうにあるもの―

今後、5年を一応の目処に、多くの方々の意見を聞き、また、たくさんの方々に関わっていただき、支援、アドヴァイスを得ながら、一つ一つ、新教区のイメージは練り上げられていきます。財政上の問題、法人規則、組織の問題など、乗り越えなければならぬ課題もきつと多いと考えますが、神が共

に歩いてくださることを信じ合う中で、様々に知恵を持ち寄り、対話と努力を重ねていきたいと思えます。今、出会うことを通して始まっていく、宣教協働の歩みは必ず私たちの間で深まっていき、私たちにとつての豊かな経験と力になっていくと信じます。そして、そうしたわたしたちの経験や知恵が、やがては日本聖公会全体の再編につながっていくことを期待しています。その意味でわたしたちの試みには大きな意味があると思っています。

互いを知ること、互いの歴史に触れること、互いの信仰に生かされること。出会うことの中でしか得られない神からの恵みと祝福をただただ希います。新たな歩みをはじめるときには必ず恐れが伴いますが、アブラハムがそうであったように、主の導きを信じ、すべてを主に委ねて、共に創造的な旅へと、一步を踏み出して参りたいと存じます。どうぞ、皆さまの知恵と力をお貸しいただければと心から願います。心からよろしくお願いいたします。

新教区設立へ向けて

「スケジュールについて、

イメージの分かち合い」

宣教主事 司祭 太田 信三

■全体のスケジュールについて

大雑把にでもスケジュールのイメージを把握するために、分科会ではスケジュール表を作成してみました。「このくらいのスケジュール、時間的イメージか」くらいで眺めてみてください。

キーワードは「5年」です。伝道教区になることを選んだ北関東教区は、5年を期限に新しい教区体制に移行するか、元の教区体制に戻るかを選択します。それゆえ、北関東教区と東京教区の新教区設立は5年後の2026年が、「ひとまず」の目標となります（「ひとまず」としたのは、5年で解決できないことや、伝道教区としての期間を延長することも考えられるからです）。5年と言っても、最後の1年は管区総会への準備、管区総会を経て新教区主教選出をしなければなりませんので、実際にはさらに短期間で準備を進めなければなりません。

5YPLN（案）（※あくまでイメージです）

	人的協働	物理的協働	財政的協働
2021年	全体議論開始、聖句/テーマ、本分科会の方針/役割/目的/等々、分科会名称、必要なワーキンググループ(WG)の選別（実務的グループのみならず、ジェンダー等の課題の洗い出しと取り組み）→他WGに先駆け、信徒間・教役者間・教会間の交流のための部会は早期に立ち上げ	・共通代祷表の作成 ・合同教役者会 ・伝道区（北関東）グループ（東京）間の協働	・協働チーム広報物発行 （両教区の紹介など） ・代祷に応じた信施奉獻 （例えば年に一度）
2022年	礼拝、教育、牧会、宣教、財政等WG（2021年中に検討）に分かれ、WG別の話し合い →並行して、教区規則、教区事務所機能、主教座聖堂規則のことを意識しておく必要あり ・宣教担当者会 ・合同礼拝、懇話会、キャンプ ・教役者の人事交流 （入れ替え人事や主日勤務）	・教会探訪	※宣教協議会開催年 （・財務担当者会）
2023年	WGより、ex)教育センター、霊性センター、システム担当（チーム）など、新教区での重点役割が提案された場合、設立に向けた取り組み開始 →並行して上記WGの議論を進める ・合同協議会	（教区会議員・代議員など）	
2024年		規則の叩き台作成開始	
2025年		共通の教区報発行？ 春 規則完成	
2026年		両教区 教会会にて新教区設立承認 秋 総会にて新教区設立承認 新教区教会会開催 主教及び常置委員選出	

5年後から逆算してみると、わりと短期集中、2023年までがポイントになってくるのがわかります。とはいえ、コロナ禍にあつて各教会でのコミュニケーションは難しい状況にあります。急ぎすぎて丁寧さを欠き、皆にとって「自

分の出来事」にならず、せつかくのこの動きがただ一緒になるだけの事務的作業になってしまつては、あまりにも残念です。この出来事を通して、一人ひとりにあらたな神の家族、信仰の友との出会いが起こり、より神によって豊かにされることを望み、丁寧に進めていくことが大切だと考えています。

次に2021～2022年は何をするのか、より具体的にイメージしてみました。これもあくまで皆さんがイメージを膨らませるための参考程度に御覧ください。

■2021年

【やること①】両教区共通の広報用資料作成、共有、わかりやすい資料やQ&Aを作成し、信徒、教役者皆が、共に歩み出せることを目指す

【やること②】次の3チームを編成する

①出会い・交流促進チーム

②新教区設立に向けた組織作りのための対話・整理担当チーム

③広報チーム

《各チームの目的・役割の詳細》

①出会い・交流促進チーム

【目的・役割】新しい教区のベースとなる「出会い」を、両教区の信徒・

教役者同士が経験するために必要なことを企画・立案・実施する

【具体的な働き…たとえば】文化、歴史、伝統等などの分かち合い／教会、伝道区・教会グループ同士のコミュニケーション促進

②新教区設立に向けた組織作りのための対話・整理担当チーム

【目的・役割】これまで別々の組織として活動してきた両教区内の多様な活動・委員会等を対話のうちに整理し、より豊かな新組織設立のために必要なワーキング・グループ（WG）案を立案・設置すること

【具体的な働き…たとえば】WG設置前に必要な対話（両教区それぞれの組織を比較し、対応する部門について要検討）と、それを踏まえたWG設置に向けた人選、情報整理を行う／組織図（意思決定プロセス）も検討・決定する

※財務／財政に関するWGなど、すぐに立ち上げが必要、可能なものは早期に立ち上げ、活動開始する

③広報チーム

【目的・役割】両教区の人々が迅速かつ平等に情報を共有しながら歩んでいくことができるために、タ

イムリーな広報活動を行うこと／誰もが「お客さん」にならないよう、皆に参加意識を自然と抱いていただけのような施策を実行すること

【具体的な働き…たとえば】情報伝達手段の確立／各チーム、WG、分科会等からの情報を迅速に伝える／両教区の情報（懇話会、講演会情報等々も）を逐次共有

■2022年

①出会い・交流促進チーム、広報チームは活動継続

②対話・整理担当チームの検討を経て、4月から各WGが始動

※各取り組みとも、「気がついていたら一年経っていた！」というところがないように、教区会期単位でスケジューリングする

■おわりに

以上がスケジュールのイメージです。皆さんも是非、目的地に用意された豊かな地平を想像してみてください。皆一人ひとりがこの舟の乗組員です。神が望まれる、導かれる土地へ、誰一人漏れることなく進んでゆくことができますように。人間的な思いではなく、神の思いを聴きながら航海を続けることができますように。

「正義と平和メッセージ」

ミャンマーをおぼえて

正義と平和協議会議長 司祭 金 大原



ほとんどの教会ではミャンマーの民主主義ために祈っているだろう。何カ月か前まで、ミャンマーの軍事クーデターと市民抵抗運動は熱いニュースだった。しかし、ミャンマーの実状について知っている人は少ないと思う。大韓聖公会は10数年前から宣教支援と人材育成の一環として青年と聖職者に留学の機会を与え、ヤンゴンに聖架修女院の分院を設置するなど、ミャンマー聖公会と格別な関係を結んで来た。個人的にも、これに関わったことがあり、そこで知ったことを分かち合いたい。

ミャンマー？ビルマ？

ミャンマーは、人口約5400万人、1300以上の民族で構成され、正式名称は「ミャンマー連邦共和国」である。19世紀に英国の植民地となり、国民の

70%を占めるビルマ族を抑圧して少数民族を優遇する、英国の分割統治政策によって民族間の対立が深化し始めた。しばらく日本の支配を受けたこともあり、1948年に「ビルマ連邦共和国」という国名で独立することになった。独立英雄たちの暗殺、少数民族問題の長期化、各種改革政策の失敗などによって国政が混乱し、結局1962年に最初の軍事クーデターが起こり、国名は「ビルマ連邦社会主義共和国」と改称された。1989年にまた「ミャンマー連邦共和国」に変わるが、軍部政権によって一方的に行われたというところで、いまだに国やメディアによって使っている国名が異なる。

繰り返すクーデターと市民の抵抗

東南アジアの中では豊

かな国だったが、クーデターの後すぐ経済は疲弊し、国連から最貧国に指定されたこともある。軍事独裁以降50年間、時間は止まっていたと言っても過言ではない。1970年代にも学生を中心に抵抗運動が行われていたが、1987年に3回も廃貨政策が実施されたことが契機となり、記念すべき「8888民主化運動（1988年8月8日に始まった抵抗運動）」が大規模となり、これによって26年間の独裁政権が崩壊し、1990年に実施された総選挙で野党の国民民主連盟（NLD）が圧勝した。しかし、軍部は選挙結果を無効にし、政治家たちを拘禁し、一部は殺害し、再び強圧的な独裁政治を始めた。これが第2次クーデターである。2010年、不正選挙で軍部と与党が政権を維持することになった。2007年にも大規模の

抵抗運動があったが、残酷にも鎮圧された。国際社会の制裁は、鎖国が長かったことと中国とインドが共助しなかったため大きな打撃を与えることはできなかった。

2015年に行われた自由総選挙によってやっと民間政府が成立した。でも、憲法に国会議席の25%を軍部が占めるとあり、国軍に対する統帥権が大統領でなく最高司令官にあったので、国民によって選ばれた政府に実権はなかった。またクーデターが起きるのは当たり前だったと言えるだろう。結局、2020年11月の総選挙の結果に軍部が不服を募らせ、第3次クーデターが起こってしまった。ミャンマーの不安定な民主主義はこうして5年で崩れてしまった。

弾圧の実状と民主化への心願

5年間の民主主義は短かったが国民に明るい未来への希望を抱かせるに充分

な経験であった。軍人たちの権力欲と暴力によって、その夢を奪われてしまったが、ミャンマーの人々はこれに屈せず、より力強く抵抗しはじめた。しかし、国軍なのに、権力に目がくらんだ軍人たちによって国民は守る対象ではなく除去すべき障害物にすぎなかった。今まで6カ月間で逮捕された人は7000人を超え、死亡者は1000人に至る。その中には何も知らない子どもが100人も含まれている。民主政府の政治家たちが少数民族の反軍と連合して臨時政府を構成したことで、不服従運動や抵抗運動を超えて本格的な内戦が始まったとも言える。軍部の対応はもっと悪辣になり、戦闘機で少数民族地域を無差別爆撃するほどである。これによって12万くらいの国内難民が発生した。

独裁政府はより堅固になり、市民の犠牲はもつとと大きくなる可能性が高

い。経済的な被害も深刻で、専門家たちは1年後には国民の半分が絶対貧困層へ転落すると見込む。加えてコロナ禍によってすでに国家経済は乱脈を極めていく。国際社会の関心と支援が切実なわけである。

個人的には、自分たちの力で民主化を成し遂げた歴史が浅いアジアにおいて、今のミャンマーの経験は大切なものであると思ひ、祈り続けたいと思っている。現在韓国の聖公会大学校で博士課程を受けているデイビッド (David W.G. Brang Htan) 司祭の訴えを引用して話を終わらせていただく。

「国際社会のすべての兄弟たちとの連帯はミャンマーの正義と自由と平和の回復に大きな力となるに違いない。この時間にも命をかけて民主主義と人権、いのちのために戦っている人々の光になつてもらいたい。」

退職に寄せて

「完全な自由は主に仕え」

司祭 ペテロ 井口 諭

金の子牛

モーセはシナイ山で主なる神から十戒を与えられます (出エジ20章)。モーセが山から戻って来ません。民はアロンに「私たちに先立つて進む神々を私たちのために造ってください」と願います。アロンは、民の金の耳輪で子牛の像を造ります。民は「イスラエルよ、これがあなたの神だ。これがあなたをエジプトの地から導き上ったのだ」と言います。翌朝、焼き尽くすけにえを献げ、座っては食べて飲み、立つては戯れます。子牛の像を見たモーセは、十戒の板を打ち砕き、子牛の像を粉々にして民に飲ませます (出エジ32章)。子牛の像は、十戒の「あなたには、私をおいてほかに神々があつてはならない」

から始まるすべての戒めを破壊します。モーセは「この民は大きな罪を犯しました。自分のために金の神々を造ったのです」と言います。偶像是自分のために造るのです。

君が代

Kさんは小学校の音楽の先生でした。一方的な見方



ではなく多方面からの学びも伝えました。子どもたちには、「君が代」の成り立ちから現在の詩と曲に決まったことも伝えました。

「君が代」が天皇制を讃えるために卒業式で歌われます。その伴奏を彼女は職務命令として受けます。彼女が「君が代」を伴奏することは、彼女の信仰を根底から破壊

するものとなります。校長に職務命令の撤回を求めます。聞き入れられず何度も処分を受けます。彼女は自分の信仰を取り戻すために立ち上がります。都教育委員会を相手に裁判は何か年も続きます。地裁の清水裁判長は、憲法違反は認めませんでしたが、1か月の停職処分の取り消しを言い渡します。一人の人間を神としてほめ讃え、天皇制を支える「君が代」は、金の子牛の像としてキリスト信者の信仰を破壊します。

天皇のため

日本聖公会は、1990年から現在の祈禱書になりました。それ以前は、文語祈禱書です。文語祈禱書の諸祈禱の中に「天皇のため」と「皇室のため」の祈りがありました。天皇のために「ついに限りなき幸いに至らしめたまえ」と祈っていました。1990年第40 (定期) 総会決議により、これら二つの祈りは削除さ

れます。その後、一つの教区で「天皇のため」の祈りがある文語祈禱書が主教按手式に使用されました。このような祈りが私たちのキリスト教信仰を豊かにするでしょうか。「君が代」の伴奏は、わたしの信仰においてできませんと拒否されたKさんを知って誇らしく思われます。

神と隣人

金の子牛の像と天皇のための祈りは、キリスト教の最も大切な「神と隣人への愛」を破壊します。パウロは、「人を愛する者は、律法を全うしているのです。：そのほかどんな戒めがあつても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます」(ロマ13・8・10)と記します。「永遠の命は主を知ること、完全な自由は主に仕えることにあります」(祈禱書33頁)との信仰の出会いが退職に際しての最大の恵みです。

執事按手を受けて

執事 セシリア 下条 知加子

としてみ言葉の礼拝での陪餐はしていませんので、管理牧師がいらっしやらない

昨年12月19日(土) 聖ア
ンデレ主教座聖堂で聖職按
手式が行われ、高橋宏幸主
教によって公会の執事に按
手されました。執事として

主日に、み言葉の礼拝の司
式・説教をさせていただい
ています。また、ご高齢の
方や病床にある方への訪問

葛飾茨十字教会の牧
師補に任命していた
だき、また引き続き
葛飾学園のチャプレ
ンとしてご奉仕させ
ていただいています。

按手式の翌主日には「み言葉の礼拝と
陪餐」の式を行って
聖別されたパンの分



餐奉仕をさせていただきま
した。またクリスマスの礼拝
においてになれなかったサ
ンピエール(隣接のケアハ
ウス)にお住いの信徒の方
たちにご聖体をお持ちする
ことができました。それら
は深い喜びとして心に残っ
ています。

現在は、感染症への対応

りと教話を担当。クリスマ
スの時期には8つの学童保
育クラブをまわってお話を
します。また職員会議で月々
の暗誦聖句についてのお話
をし、保護者や職員向けに
はチャプレンからのお便り
を届けるようにしています。
コロナ禍以前には、毎週月
曜日にサンピエールのラン
チをご一緒に交わりの時
をもっていました。イエス
さまの生き方を伝え、神さ
まが私たちを心から大切に
してくださっていることを
分かち合っており、それを
大切にしながら一緒にさせ
ていただいています。

も非常に制限されており、
教会に來られない信徒の方
々に、ご聖体をお届けする
ことができるようになる
ことを待ち望んでいます。
保育や高齢者のための施
設は感染症への配慮をしな
がら、休まずに活動してい
ます。葛飾学園では、保育
園の毎週の園児礼拝でお祈

この度の執事按手式では
感染症予防のため式場への
入場者を制限、その代わり
に按手式の様子がインター
ネット配信されました。参
加いただけない方々にその
様子をお伝えすることがで
きたことはとても良かった
と感じています。すべての
方がインターネットの利用

が可能なわけではないこと
は重々承知していますが、
今できることを探し、知恵
と工夫をもって進めていけ
たら、世界はより「豊か」
にされていくでしょう。

執事として主イエスの命
のしるしを分かち届け、み
言葉を伝え、また人々の必
要を教会に伝える働きは、
より様々な方法で対応でき
る可能性を感じています。
少々苦しいことにも挑戦し
つつ、宣教の器として用い
られるよう、これからも皆
様とともに祈り求めてゆき
たいと思います。感謝。



《信徒リレーエッセイ》

リモートでトラクト運動

聖パウロ教会

阿部 基裕

日曜学校新聞「はこぶね」
40年ほど前に、「日曜学校で
週報のようなものをつくつた
らどう?」と、当時伝道師と
して勤務されていた大畑主教
様が提案されたのが始まり
だったか。その後月刊となり、
御言葉と牧師メッセージ、行
事予定を載せて配布するよう
になる。

公休となった昨年3月
以来、それまで礼拝に來てい
た子どもたちと保護者の皆様
が自宅でお祈りできるように
と、ウェブ版「はこぶね号外」
を毎主日ホームページに配
信、60回を超えた。特禱・福
音書・牧師メッセージからい
ただくお恵みの豊かさに、対
面での公禱のときにはなかつ
た刺激を感じる。19世紀の英
国オックスフォード運動にお
けるトラクト(小冊子)運動
を気取ってみてもいいかもし
れない。なお、一般信徒向け
には、新約聖書十三書簡に因
んで、月刊「聖パウロ書簡(だ
より)」の配布も始まった。

司祭 イサク 小笠原愛作師

司祭 笹森 田鶴

イサク小笠原愛作司祭は、そのご生涯を離島伝道におさげくださいました。もちろんご出身の小笠原村父島という場所ではありません。けれどもすでに司祭として横浜教区で奉職されていた時、当時まだ米軍時代であった島民の教会生活のために請われ、野瀬秀敏



主教の命により、牧会現場を離れ、1962年に小笠原に向かわれたのでした。返還前の旧欧米系島民の信仰生活のためのご決断

でした。以来、現在でも島で唯一のキリスト教の教会である小笠原聖ジョージ教会は小笠原愛作司祭の司牧により教会活動を継続していくこととなります。2020年11月5日逝去されるまでの58年間です。

愛作先生（普段このような呼ばせていただいていた）はユーモアがあり、

静かで、決して人に何かを無理強いすることなく、お優しい方です。そしてお話をしていると必ずイエスさま、神さまのお話をしてくださいました。ごく自然に、普段の生活において神の臨在を表現できる牧会者でした。小笠原の日本返還後、平日は支庁でのお仕事、土日には司祭として奉職

と、休む暇なく教会のために尽くされていました。またどんなにお忙しくても、

追悼

介します。

「小笠原では最初はくじらが光でした。その光を求めて人びとが集まってきました。そして港には灯台が作られ、今度は港の灯台の光を頼りに人びとは生活をしてきました。けれども人間が本当に必要なとする光は、神さまの光です。その光を

ますますこの世界に広めるために、いずこにあつてもわたしたち一人ひとりが神さまの光を輝かせていきましょう。」

愛作先生、本当にありがとうございました！またお会いします。

髭の司祭（ヨセフ 高島靖先生）の思い出

聖アンデレ教会 白水暢

聖アンデレ教会の司祭に就任された高島先生は、その頃では珍しい形の髭を生やしておられ、何となく近寄り難い感じの方でした。

その頃、世界的な問題は「エイズ」の伝染拡大でし

た。わが国でも、様々報道され、国民の大きな心配の種でした。

殊に、教会では大切な陪餐との関連が懸念されていました。

私もいろいろ調べましたが、具体的対策を考えたいと、知人の東大教授の速水正憲氏にお会いし、この伝染病について詳しく教えを乞いました。

たところ、速水氏から「今の陪餐方式では伝染の危険は免れない。」



このように変えてはどうか」とのご意見を頂きました。

私は、神様からのお恵みを頂く聖餐式は、衛生性の確保が絶対必要であると確信するに至ったのでした。

次の主日、高島司祭にこれ等の経緯を報告し、私共の教会でも、この方式に変えて頂くことは出来ませんか、とお願いしましたとこ

ろ、先生は、「私もこのことは早急に対応しなければならぬ重大事だと思つていて。早速信徒の皆さんに御謀りしよう。」と応じて下さいました。

先生のご指示により、翌主日、ホールに集合した信徒の皆さんに、医師の天野恵さんから、医学的に懇切丁寧な説明をして頂き、皆さんとの討議の結果、全員賛同が得られたのでした。

数日後、高島先生と私は、教区事務所に山田襄主教を訪ね、これまでの検討の経緯を説明し、インテイクシヨンの実施を承認して頂きたいとお願いしました。

「頑固一徹な方」と思い込んでいた山田主教が、実に快く賛同して下さいました。

その後の様々な手続きは、総て高島先生が実施して下さい、その結果、今日のようになつたのでした。

高島先生 有難うございました！

（2020年12月2日ご逝去）

正義と平和協議会 オンライン講演会

子ども食堂からフードパントリーへ

7月31日、公益社団法人東京子ども子育て応援団から河野司事務局長、今村和彦代表理事をお招きし、約60名の方々が共にお話を伺いました。

「キリスト者だから出来ること」

河野司

6年前、活動の基である子ども食堂が始まり、全ての方を神からのお客様として迎え、来店動機は問わない・マスコミの取材は受けないというルールを守り、居場所提供・夕食提供・学習支援へと発展。『自ら貧困の申請が必要な行政の支援に躊躇し、生活保護を受けずにいるひとり親家庭が多い日本の相対的貧困の大きな問題。精神的貧困による孤立・疎外。公的安全網の穴。欧米に比べて非常に遅れている共助ベース。子ども食堂に出かけること自体を隠したい悲しいハードル』等々の事情に対し、必要な人には限りなく低いハードルで、そうでない方にはより見えにくい活動で支援する。神の愛を持ち続けてこそ、公平・公正・平等

が生きる。「最も小さな者にしたのは、私にした事である」を信じて、キリスト者として奉仕させていただく。加えて教会を借りられる恵み・教会の建物を広く開かれた場として活用できる恵み。神に信頼する活動には信じ難い事が起こる。神の愛がなければ成り立たない活動であることを痛感している。

「神様の召しと同労者」

今村和彦

キリスト者か否かを問わず無給のボランティアが支える場に参加できることは得難い喜び。神から受けている無償・無条件の愛に報いる活動は、フードロスと貧困家庭の橋渡しを通して、「売れない食材を引き取ってくれて・食材を下さって・役に立てて」『ありがとう』が循環する。神様の

の召は人それぞれ。事業面を担う河野さんの傍にどんな働きにも必要な同労者として、法律家である自分を神が置かれたのが自分の召である。

(文責・奥山美喜)

講演、活動の詳細を左記URLからぜひご覧ください。
<https://drive.google.com/file/d/1sQoLSzBODWTnqV6QkdQIPrsTuHhK9/view?usp=sharing>



※ボランティア歓迎

河野さん080(5503)7151までご連絡ください。

◇ ◇ ◇

世にあるすべてのキリスト教会が全ての被造物と社会への責任に目覚めて燈を灯し、再び来られる主を迎えることができますように、主の正義と平和を実現する働き人とならせてください。

(金大原司祭の祈りより)

【司祭の1冊】

詩編を祈る

W・ブルツゲマン著
日本キリスト教団出版局
2015刊

聖職候補生 中村 真希

旧約聖書学の巨匠W・ブルツゲマン、その数多い著作の中から、詩編に特化した『詩編を祈る』をご紹介します。訳語等少々読みにくいところもありますが、私はこのゴツゴツした感じもまた旧約聖書、そして詩編の味でもあると思います。



著者はいくつかのテーマに基づいて詩編を解説すると共に、「詩編のリアリティ」さへ私たちの目を向けさせようとします。詩編の言葉はそれ自体美しい旋律のように心に響くものですが、それらの言葉はイスラエルの民の泥臭い現実の中に生起する、時に怒りや嘆き、抗議の思いなどを通して神にぶつかる叫びであったり、その中から絞り出されるようにして生み出された賛美だったります。著者はそれらの「人生の生々しさ」の中に生み出された力強い言葉の数々を、私た

ち自身が生きる生々しい現実の中で受け止め、祈りの言葉とするよう促します。

ことに、「幸せで平静なものではない私たちの経験」——思いがけなき、逆境の経験において受け止めるからこそ、詩編の持つ力強い言葉が、真の「祈り」となるのだ、と著者は語ります。神に真正面から対峙し、「ゆるせない」「耐えられない」という激しい憤りや嘆き、人間の感情を包み隠さず差し出したときに、全

く新しい、驚きの転換を経験することもあります。死に物狂いですべてを神の前にあらわにして対話し続ける切実さ、生々しさ、激しさは、習慣的な祈りの中で見えなくなっていることもあります。

私たちは本当に神の前に自分自身を差し出して「祈れて」いるのだろうか。自身の信仰に、そして私たちの人生、生活、命に立ち向かっているだろうか。現代の信仰者が詩編の言葉を祈るとき、改めて立ち止まらせてくれる本だと思います。

『日本聖公会の中で 一番新しい教会の新しい礼拝堂』

インマヌエル新生教会 司祭 卓 志雄

2020年10月31日の起工式をもって始まった「インマヌエル新生教会の新礼拝堂及び牧師館の建築」は神様の導きと東京教区の皆さんのお支えによって、今年8月16日無事完成を迎えました。現在、新型コロナウイルス感染防止に細心の注意を払いながら、11月6日の礼拝堂聖別式に向けて準備を進めています。

インマヌエル新生教会の教会建築において、新型コロナウイルス感染拡大は奇しくも



重要な出来事となりました。未だかつて経験したことのない「パンデミック」状況の中で建築をどう進めるか、い

え、進めるかどうかから議論を積み重ねました。

キリスト教会は、常に変化の中で変わらない、変えてはならない

大事なものを守るために、敢えて変えることを選んで主の福音を宣べ伝えてきました。「宣教」「礼拝」「交わり」「奉仕」など教会の大事な働きを今までより丁寧にかつ積極的に実践していくために池袋聖公会、東京聖マールチン教会、練馬聖ガブリエル教会は2019年インマヌエル



ル新生教会として誕生し、大きな変化をもたらす営みの象徴として新礼拝堂建築を捉えてきました。三つの教会が一つとなり機運がこれ以上になく高まっていると思われ、また「今」でないと建築を進める力がなくなってしまうかもしれないという判断があつたため「やるリスク」を選びました。「やるリスク」と「やらないリスク」はどの組織においても常に存在するものではないでしょうか。

パンデミックにおいては先行きに対する不安からどうしてもやるリスクの方に気を取られてしまいがちですが、未曾有の状況においては当たり前だったかもしれないせん。しかし「変化をもたらす力がある今」やらない方を選択したら、いつかリスクは逆転し、ある日教会は変化をもたらす力を失い、動けなくなってしまうのではないか。そうなる前に敢

えて教会は「やるリスク」を選び、建築を進めながらリスクを回避し共に歩むことを決心し、三つの教会が持ち寄った「賜物（祈り・奉仕・財政・伝統の力）」を合わせ、外部募金に頼らず自己資金のみで、礼拝堂建築を行うことにしたのです。

これまで新型コロナウイルス感染防止のため新しい礼拝堂の建築現場に自由に近づくことも許されず、長い間礼拝休止になっていたこともあり、建築完成の実感が持ちづらい状況です。でも、後もう少しです。新しい礼拝堂は東京教区の皆さんを待っています。新型コロナウイルス感染



の心配が少なくなり、皆が新しい礼拝堂に集まれる時が必ずやってきます。

ウィズコロナにおいても、ポストコロナにおいてもインマヌエル新生教会の新礼拝堂がイエス様と隣人を覚えて共に礼拝を献げる場所となりますように。イエス様と隣人と共に愛の交わりを深める場所となりますように。イエス様の代わりにイエス様の愛と恵みが必要とする隣人に仕える場所となりますように。全ての人々の癒しと慰めの場所となりますように、東京教区の皆さんと共に祈りを献げたいと思います。



中高生世代 オンライン サマーキャンプ

「間」

今年度も多くの方のご協力のもと、オンラインという形ではありますが、

中高生世代キャンプを行うことができました。キャンパー4名、スタッフ8名、顧問1名、聖職候補生2名の計15名で、8月8日に自己紹介のためのプレキャンプを、同月17日～19日の3日間で本番のキャンプを、どちらもZoomを使用して行いました。直接会うことができない状況の中、時間もできることも非常に限られていましたが、ビデオチャットを通して、笑顔を交わしながら楽しく過ごすことができました。

今年度のキャンプテーマは「間」。たったの漢字一文字ですが、前後の空



白に文字を入れることで「空間」、「仲間」、「中間点」など、様々な言葉に変えることができます。キャンプ中の交流を経て、15名それぞれが、前後の空白に入れ

てみたい文字、自分が大切にしたい「間」について深く考えることができました。

今年度行ったプログラムとしては、スタッフの用

意したテーマについて考え、話し合う「わかちあい」や、聖書箇所を読んで意見を共有する「みことば」という例年行っているものに加え、他にもオンラインならではの方法で様々な遊びをしました。全員が見えない状態で同じポーズをとったり、相手がどんなおやつを持っているのか当てたりと、言葉での説明や質問が重要になる遊びが多く、直接会えない中でも楽しみ、お互いに心を通わせることができました。ネット上のページを使ったお絵描きでは、みんなが同じキャンバスに一つの絵を描き、とても良い思い出になったのではないかと思います。

今年度はキャンパーの半数が初参加、またスタッフの方も半数が初スタッフだったことで、初々しさに溢れていたキャンプでしたが、それでも互いに笑顔を見せ合うことで、すぐに打ち解けて友達になることができました。

編集後記

約一年半ぶりにコミュニケーションを発行することが出来ました。この間、世界中が余儀なくさまざまな変化を求められる中、日本聖公会も大きなターニングポイントを迎えています。その大きな1つが教区の再編成の動きで、これは聖公会の未来を左右する大きな出来事になるでしょう。今回、北関東教区との協働について、今までの動きを詳しく特集しましたので、是非、関心を持って読んでいただきたいと思います。

広報の働きはどのように教区の動きを信徒の皆様にお伝えすることが大きな役割ですが、礼拝の再開がなされていない教会が多い中で、その働きはますます重要になっていきます。そのことをしっかりと自覚し、今後とも活動してまいりますので、皆様も、もし特集のアイディア、投稿などありましたらお知らせください。今こそ教区、教会が新しく前に向かって歩みを進める時だと思っています。

(渡辺)

ちょっと聖書、ときどきユーモア (四十九)

※今年はオリンピックが開催されましたので、特別にオリンピックなぞかけをお届けします。

- 1, オリンピックとかけまして、聖餐式とときます、
そのところは、どちらも聖火(聖歌)ではじまります。
- 2, オリンピックの日本チームとかけまして、パウロの生涯とときます、
そのところは、快進撃(回心劇)がありました。
- 3, オリンピック選手の心がけとかけまして、キリスト者の務めとときます、
そのところは、どちらも、いいプレイ(play、pray)をすることです。
- 4, オリンピックでの勝敗とかけまして、キリスト教の魅力とときます、
そのところは、やはり0敗(礼拝)がいいですね。
- 5, オリンピックとかけまして、キリスト教の教えとときます、
そのところは、どちらにも、いろいろな競技(教義)があるでしょう。
- 6, オリンピックとかけまして、教会音楽とときます、
そのところは、なんだかんだいってもバッハがトップなんです。
- 7, オリンピックに出場とかけまして、イエスの十字架とときます、
そのところは、どちらも、人の積み重ね(罪かさね)の結果です。